

西鶴浮世草子「世界の借家大将」の教材研究

——指導書からの深化をめざして——

小原 亨

一 高等学校教科書中に見る「世界の借家大将」

高等学校・国語の教科書に所収される井原西鶴の浮世草子作品は数多い。その大多数は、いわゆる町人物と呼ばれる作品からの採択である。中でも「大晦日は合はぬ算用」〔西鶴諸国ばなし〕巻一の三〕と「世界の借家大将」〔日本永代蔵〕巻二の一〕が、その双璧をなしている。近世中期の民衆の生活様態が平易な文章で読みとれ、当代の文化・風俗に親しめるだけでなく、現代につながる登場人物の描写・人間観を通じて現実生活に生きる人間像を学ぶことのできる教材としても有効であることが多く採択される理由であろう。しかし、西鶴浮世草子作品は中古・中世の諸作品教材に比べ、その文章上の平易性ゆえに、授業で取り上げられる優先順位がおそらく低いであろうことは、これまで現場で授業をしてきた経験からも想像できる。これは、難解古語や文法といった語学学習の側面に不十分であること。現代と通じる感覚もあ

る生活実態の描写が、俗的な物語・教訓となってしまうこと。こういった二点のマイナス面が、古語に親しみ、古い文化・感性に触れるという教科上の目的にとつて、不適當であると感ぜられるためであろう。

とは言え、井原西鶴のみならず、上田秋成、松尾芭蕉、その他近世作家たちの作品は、平易な文章の中にも近世以前の古典作品や中国の古典作品に依拠した表現の味わい深さが秘められている。古典の教養に裏打ちされた知識も必要となる。表現上の工夫も凝らされている。もちろん教授者はそういった文章表現を読む楽しさも学習者に伝えるべきであり、その観点の指導法も当然導入されてはいる。さらに言えば、内部に込められた作者の創作意図・創作態度を理解することで、教授者自身の読みも深められていく。本稿では「世界の借家大将」を例にとり、教材研究の方法を提示してみたい。

「世界の借家大将」は全編約二千字程度の章段である。借家住まいでありながら一代で巨富を築き上げた実在の分限者・藤屋市

兵衛（以下「藤市」と娘をモデルにして、その儉約ぶりや合理的精神が描かれている。しかし、「世界の借家大将」を全文所収している教科書は少ない。現行教科書で見ると、例えば右文書院の二種類^①は、藤市の節約の工夫を述べた部分の途中、「その年明けて、夏になり……」と時系列が進行する以前の話までしか所収されていない。また、数研出版の教科書^②では、初物茄子の買い方、屋敷の空き地活用法といった経済上の工夫・才覚といった描写までは所収されている。しかし、その後の娘のしつけ方や、町内の若者たちへの長者指南の部分は所収されていない。後半のパートがなくては、一面的な藤市の経済的合理性しか読みとることができない。娘のしつけを通じた藤市の人間像を読みとることができない。藤市の生きる指針たる「人の鑑にもなりぬべき願ひ」も不完全にしか理解できない。長文ではあるが、「世界の借家大将」はやはり全文を読んでこそ、西鶴の創作意図も理解でき、藤市という人物像の正確な把握もできる。その意味から、全文所収している教育出版と桐原書店の教科書、ならびに桐原書店教科書準拠の指導資料^③とに即して述べていきたい。

さて、教育出版の教科書では、全編を内容上五つの段落に分轄し、各段落ごとにそれぞれ独自の見出しをつけている。字教制限上、「世界の借家大将」の本文全ては掲載できないので、教育出版教科書の段落分けに沿って、「世界の借家大将」の概観を見ていきたい。（なお、以後の引用の都合上、I～Vの記号を便宜的に付けた）

I 「借家住まいの分限者」

借家請状の体裁から始まり、藤屋市兵衛（藤市）が千貫目持ちの借家住まいであることを紹介。家持ちになったことから「借家住まいの分限者」の位置にとどまることができず、悔しがる。

II 「藤市の工夫と始末」

藤市は元来利発者であり、情報収集も怠らなかつた。ふだんの身持ちも質素で、衣服・履き物などにも工夫と始末を重ねたり、外出しても生活上役立つ拾い物に注意して、銀を貯めてきた。

III 「藤市のやりくり」

藤市は吝嗇家ではなく「人の鑑にもなりぬべき願ひ」を抱いて工夫をしてきた。多忙時の時間節約や、商品の受け取りの知恵、経済的な買い物工夫、家屋敷の庭木の合理的な植栽などをなして財を築いた。

IV 「娘のしつけ」

娘の養育についても、嫁入り道具には銀山の絵を描かせたり、自宅でいろは歌や文字を教えたりして、始末者になるべく一般とは異なる養育方法を取り入れた。その結果、娘も親の世渡り法をよく会得した娘に成長する。

V 「長者の指南」

長者になるための指南を請いに来た町内の若者が、人日の節句の日であったため、吸い物か雑煮か煮麴かと、その馳走を

期待する。三人に世渡り法を教授した後、馳走の音と思つたのが見事にかわされる落ちて結ぶ。

二 表現上の観点から

教科書会社では「世界の借家大将」にどのような教材観と指導内容を意図しているのだろうか。全文所収がなされているもう一社、桐原書店の教科書に準拠した、いわゆる教授者のための指導書『探求古典B 古文編【指導資料】』（以下「指導書」）から見てみたい。まず「単元のねらい」では、現代につながる時代Ⅱ近世の作品を読むことの共感と楽しさが味わえることとらえている。

作中人物や作者の考え方・興味が現代にも通じることに気づき、共感するところが多いに違いない。

（中略）まずは、これまで学習した古典文法の知識を生かし、作中人物の心情や描かれる情景を自分の言葉で感じられやすい近世文学を読むことで、その楽しさを味わってほしい。

藤市の人物観に触れ、現代にも通じる価値観を読みとることは、単なる語学的・文法的な学習にとどまることなく、文学作品を読みとる姿勢のあらわれである。ここに大きな異議はない。しかし、「古典文法の知識を生かし」た読みとは言え、「餅はつきた

ての好もしく、春めきて見えける。」などと、連体形で閉じられる文体である。むしろ古典文法の学習からは離れて、文学作品を素朴に鑑賞する作業と心構えが必要となる。それにしても「楽しさ」とは指導書中によく使用される語であるが、この「世界の借家大将」の場合、何を楽しめばよいのだろうか。その点については、次の「単元の構成」の部分であらためて提示される。

『日本永代蔵』は、めまぐるしく変動する経済社会に生きる町人たちの姿が読者の共感を得た作品で、本単元では、一代で巨万の富を築き上げた男の、極端な儉約ぶりを描いた「世界の借家大将」を取り上げた。

並外れた儉約のありさまだけでなく、男の持つ合理精神や、たくましく生きる姿勢などを、軽妙な文体に沿って楽しく味わいたい。

つまり藤市の「合理精神・たくましさ」を、「軽妙な文体」の中から読みとることで楽しさを味わうわけである。しかし、「軽妙な文体」とは言っても、そこにある西鶴の俳諧性にまでは及んでいない。表現学習としても、読解学習としても、修辭上に表わされた俳諧的手法の面白さを味わう観点は導入されていない。俳諧的手法の例を二・三示してみよう。教育出版社教科書の段落区分で言えば、I「借家住まいの分限者」の中に、貸し金の抵当にしていた家作が手に入ったため家持ちになり、借家住まいの分限者

でなくなることに藤市が悔しがる有名な場面がある。

今までは借家に居ての分限と言はれしに、向後、家あるからは、京の歴々の内蔵の塵埃ちりほこりぞかし。

借家住まいの千貫目持ちであるからこそ「都の沙汰」となるのであるが、家持ちになってしまつては、洛中の歴々の商人たちと比べても足下にも及ばない。現実的にそういった長者たちは、例えば『西鶴織留』巻二の一「保津川の流れ山崎の長者」に登場する「山崎屋」が、七千貫目を持つ「洛陽分限袖鑑の第二十八番目」の長者であつたように、藤市をはるかに上回る大金を所有していた。そういった京代々に続く長者の資産に比べたら、藤市の持つ一千貫目など、まさしく「内蔵の塵埃」のような比較にしかならず、自らも「塵埃」のように軽い存在でしかないことを表す俳諧文特有の掛詞的な表現である。

また、Ⅱ「藤市の工夫と始末」でも、藤市が「葬礼」に出かけるところで「鳥部山」の地名が出される。

町並みに出る葬礼には、ぜひなく、鳥部山に送りて、人よりあとに帰りさまに、六波羅の野道にて、(中略)蹴つまづく所で、燧石ひうちいしを拾ひて、袂に入れける。朝夕の煙を立つる世帯持ちは、よろづ、かやうに氣をつけずしてはあるべからず。

野間光辰氏くわんちんが指摘したように、実際の火葬場は建仁寺の東南付近にあつた。現実とは異なる場の設定は、俳諧の付合的手法があればこそであつた。つまり、「鳥部山」から「煙」への展開は、言わずと知れた『徒然草』の文章を踏まえたものであることが読者には明白である。さらに『徒然草』の無常の世界観は、次の生活上の注意点として「燧石」を持ち帰る実用性により、現実感溢れる藤市の行動原理に収斂される。読者には、無常から現実への、一瞬にしての世界観の転換の妙が味わえる。

また、Ⅳ「娘のしつけ」ではよく言われているように、その俳諧的修辭が分かりやすい。

「洛中尽くしを見たらば、見ぬ所を歩きたがるべし。『源氏』『伊勢物語』は、心のいたづらになりぬべきものなり。」と、多田の銀山、出盛りしありさま描かせける。この心からは、いろは歌を作りて読ませ、女寺へも遣らずして、筆の道を教へ、ゑひもせず京のかしこ娘となしぬ。

この「いろは歌」「ゑひもせず」「京」「かしこ」の詞章は、教科書の脚注でも指摘されるように縁語的連想である。この面白さは現代の高校生でも分かりやすい。さらにこれより前の部分、藤市の言葉にも着目したい。娘の嫁入り道具として、「多田の銀山」の屏風を描かせる意図を述べた言葉である。ここには『源氏』『伊勢物語』とあるが、なぜ『源氏物語』『伊勢物語』と併記

されないのか。あるいはまた、なぜ『源氏』『伊勢』と併記されないのか。その方が対表現となり、整理された安定感もたらされる。なのに『源氏(物語)』を示すところで、なぜ「物語」が付けられていないのか。そこには「源氏」でなければならぬ理由がある。『源氏』であるからこそ「多田」の語が活かされる。つまり「源氏(物語)」「多田(源氏)」「多田」銀山の連想で読ませる手法が、読者へ面白味をもたらす。さらに言えば、ここでも娘の教育として、常識的には「源氏物語」「伊勢物語」を与え、雅な世界に親しませるべきところを、この連想によって一瞬にして商売上の現実性を教育する「多田銀山」の世界に変転される。こういった雅から俗への情緒の変転も、読者には俳諧的妙味を感じさせる展開であった。

西鶴は俳人としての地位も確立していた。彼の文体に俳諧的手法が活かされていることは、当時の読者にとっては自明のことである。読者はそれを踏まえた上で西鶴の文章を読み楽しんでいく。現代の高校生にも、この表現上の妙味と俳諧的文体のリズム感は楽しめる。西鶴浮世草子作品を教材として取り扱う以上、教授者は、やはり随所に見られる俳諧的文章技巧にも理解を及ぼすべきである。さらにまた学習者にも、そのような表現の面白さに親しむことができる教材であることも提示していきたい。

西鶴特有の俳諧的文体は、いわば一次元的な「言葉の面白さ」でもある。加えて文章読解から得られる二次元的な「形象の面白さ」を感受するだけでも、藤市の「合理精神・たくましさ」とい

った要素を学習することは容易である。しかし、俳諧的文章の妙や、文章読解のみで得られる楽しさに教授者自身が止まっていたは、「世界の借家大将」の本質的な理解は得られない。二次元的な平面的な読み止まらず、西鶴の創作意図や創作態度といった三次元的な理解を加えることで、「世界の借家大将」の文学的モチーフが立体的に鑑賞できる。教授者自身の理解を深めていく教材研究が大切である。作家の創造性への理解がなされて、作品の深化した理解が可能となる。その態度は、西鶴の構想に即して読むことへの階梯ともなり、「世界の借家大将」の読みをさらに深めたものにする。

三 指導書からみた読解の観点

「世界の借家大将」において、近世貨幣経済社会の中にあつては特異ともいえる藤市の人間性・精神性を学習することが指導書では目標となる。それでは指導書は、どういったポイントで藤市の人間像をとらえるというのか。具体的な「授業展開例」として、およそ十数点に絞って発問例を示し、導き出すべき学習者の「答」を提示している。学習者との発問↑↓発表とといったやりとりを通じて、どこに読解のねらいを絞っているのかがうかがえるポイントである。この発問のやりとりを通じて、学習者に「世界の借家大将」の主題を読み取らせようとする意図がある。そんな読解ポイントの中でも、特に眼目と思われる十二点について、長

い引用ではあるが、指導書のとおり「問」と「答」を示している。(11)でも①～⑫の記号を便宜的に付けた)

①問 「借家請状」の文体で藤市を紹介している効果を考えよ。

答 (前略) 身元保証が必要な借家人は一般的には貧しく、「千貫目」持つ借家人は通常ありえない。そのアイロニーで読者の意表をつく表現となっている。

②問 藤市が「これを悔や」んだのはなぜか。

答 借家住まいをしている者としては、千貫目という財産は大きいものだが、家持ちとなってしまうと、ほかの本物の金持ちたちに劣ってしまうから。

▽ 普通なら借家人から家持ちに身分が上がることを喜ぶところである。藤市の心意気を感じ取りたい。

③問 第二段落前半における作者の言葉を引き出し、どのように藤市を評価しているかを述べよ。

答 「朝夕の煙を……気をつけずにはあるべからず」。藤市の細やかな儉約の気配りを、生計を立てるうえで必須のものであると、高く評価している。

④問 「不断の身持ち、……あるべからず。」で、藤市の儉約家ぶりが表れている箇所を指摘し、儉約につながる理由をまとめよ。

答 「肌」に単襦袢、大布子、綿三百目入れて、一つよりほかに着ることなし。」↓布子は袖より質素である上、通常

は百匁入りを重ね着するが、三百匁入りの大布子一枚で済ませた。(この他、「袖覆輪・革足袋に雪踏履き・花色と海松茶染めの絹物・既製品の紋・麻袴と肩衣・葬礼の帰り道での薬草引き・燧石の拾得」など全部で八点を抜き出して、それぞれの理由を示し「答」が設定されている。)

⑤問 藤市はなぜ「一つ」しか買わなかったのか。

答 縁起物とはいえ割高な初物を二つ買うよりも、今は一つにおいて出盛り期にもう一つ買う方が、大きなものが手に入り経済的だから。

⑥問 藤市の価値観は、世間一般の人に比べると、どのような違いがあるか。「餅」と「茄子」の例のそれぞれについて整理せよ。

答 世間一般の価値観 藤市の価値観
「餅」・自分の家をつく↑↓・「大仏の前」に注文

(出費を避けたい) (多忙時には注文した方が得)
・つきたてが好ましい↑↓・冷めてから買う
(早く買いたい) (目減り待つ)

⑦問 「茄子」・二つを三文で買う ↑↓・一つを二文で買う (割安の感がある) (初物は割高である)

藤市の行動について、第二段落後半の内容は、第一段落・第二段落前半と比べてどう異なるか。「この男……なりぬべき願ひ」に注意して説明せよ。

答 第一・第二段落前半に描かれる藤市の儉約ぶりは、世間一般から見ると極端なものであるが、第二段落後半の内容は、藤市の態度が、人の手本になろうとしてみても、合理性を持つことが示されている。

⑧問 「多田の銀山」を描かせたことのおもしろさはどのようなところにあるか。

答 夫婦の寝室に飾る嫁入り屏風としてはいささか不似合いな銀山を描かせたところ。合理的な藤市らしい。

⑨問 これらの教育の結果、藤市の娘はどのように育ったか。簡潔にまとめよ。

答 藤市の実利優先の性質を見習って、むだな遊びをせず、自主的に身の回りのことをする賢い娘に育った。

⑩問 「灯心を一筋に」するのはなぜか。

答 灯心は普通二〜三筋にして明るさを保つが、娘は、父の儉約の精神を察してこのように行動しているのである。

⑪問 藤市の、娘に対する教育者がよく描かれている箇所を指摘せよ。

答 ・「嫁入り屏風をこしらへ取らせけるに：多田の銀山、出盛りしありさま書かせける。」

⑫問 真面目な儉約話の中の、ユーモアを感じさせる箇所を指摘せよ。

・「いろは歌を作りて誦ませ、女寺へもやらすして、筆の道を教へ、ゑひもせず京のかしこ娘となしぬ。」

答 ・正月の風習の一つ一つについて、その起源を神代まで遡らせつつ、儉約の精神という観点で説いていく点。
・近所の男子たちに夜食の期待をさせておいて、最後に夜食を出さないのが長者になる心と落ちをつける点。

一で示した教育出版教科書の段落分けに従って、「世界の借家大将」全体を序・中・終の三つのパートに分けることにする。序盤はⅠ「借家住まいの分限者」・Ⅱ「藤市の工夫と始末」である。ここでとりあげた十二のポイントのうち、①〜④の間が序盤にあてはまる。また、中盤はⅢ「藤市のやりくり」で、ここではポイントの⑤〜⑦があてはまる。終盤はⅣ「娘のしつけ」・Ⅴ「長者の指南」であり、ポイントの⑧〜⑫があてはまる。

序盤では、Ⅰで藤市の世間的立場を読みとらせた上で、①の問答を通じて表現効果を学習させている。また、②の▽以下にある「藤市の心意気」についての問は、借家人でありながら分限者であることを誇る藤市の心情を感じ取るのが目的である。Ⅱでは③・④で問われているように、西鶴の藤市に対する評価や、藤市の非凡な人物像を読みとることが観点となる。しかし西鶴の評価については、指導書のように単なる「儉約の気配り」として経済的観点からしか理解しないのでは一面的な読み止まる。同様に、指導書が示す④の解答例では儉約の理由を確認するだけに止めている。指導書が示す読みは、西鶴が藤市に込めた人物造形の意味にまで考察が及んでいない。

序盤の④に続いて中盤の⑤・⑥の間でも藤市独自の儉約について考えさせようとする。合理的かつ独創的な判断に基づいて、他の人とは違う価値観を持って行動していたことも読みとらせる。藤市は「人の鑑にもなりぬべき願ひ」を抱いており、続く⑦の問いかけも、その「願ひ」が、単純な吝嗇家にとどまらない動機を含んでいることを理解するように設定されている。しかし、ここでも指導書は「人の手本になろう」としての合理性にその理解を止めている。それでは藤市という人間像を創造した西鶴の意図へのアプローチが不十分である。商人の手本としての合理性に止まる解釈でなく、どのような創作意図のもとに藤市像が創造されたのか、その観点が導入されてこそ物語の本質も理解できよう。

最後に終盤からは、IV全体の読みを基盤にして、⑧～⑪の間で藤市の娘養育法やその影響を読みとる。藤市の後継者育成への思いや、それを受け止めた娘の成長を理解する。しかし現実の藤市の娘は、「世界の借家大将」に見られるような父親の跡を嗣ぐべき逞しい育ちの女性ではなかった。藤市の吝嗇性のためか、分限者の家に生まれたというのに下女奉公までさせられたので、哀れにも三十歳余りで首をくくって自死したという。西鶴は明らかに理想の娘像を設定している。そこに西鶴の創造意識が働いた。最後に、三人の男子たちへ言い聞かせる長者指南のVの部分も、⑫での問いかけは、物語終盤での落ちを付けたユーモア性のある表現を感じることが目標となる。それ以上に、正月の年中行事でさえも、合理的な現実認識を示す藤市にあっては、始末・節約の

意義があることを示している。内容読解の上でも重要な部分である。表現上のユーモアだけに読みを止めてはならない。娘の形象化とともに、ここでも娘の形象性や藤市の心意気を理解してこそ、作品の読みが深められる。

「世界の借家大将」は、致富成功をなした男の方法論を読み取るものではない。また、藤市の致富成功譚を教訓的に受けとめるものでもない。人間心理に踏み込んだ合理的精神の理解に楽しみがあることは指導書でも基本にすえられている。それに加えて、藤市という成功者の発想・思考法を読解し、彼の世間的常識にとられない姿勢を通じて、独創的な人物像を読みとる面白さもある。広嶋進氏も言うように「主人公の知恵・才覚による成功譚を、まったくの夢物語として、あるいは過去の栄華話として、読者に提供しようとしたもの」と把握して、過去の長者の成功物語としての意外性や楽しさを味わうことは可能ではある。指導書が導き出そうとする「世界の借家大将」の読みは、藤市の合理的精神と節約の諸相から、その生き様を把握することであった。授業における読みなら、その範囲が精一杯かもしれない。しかし、教授者の教材研究においては、「世界の借家大将」の理解を藤市の精神性・人間性にとどめてはいけない。「世界の借家大将」には、作者西鶴の創作意識が大きく関与している。実在の藤市像からは離れ、西鶴の価値観で創造された新しいタイプの経済人の創造。西鶴は主人公・藤市の人物創造を通して、読者に何をもたらそうとしているのか。文学的創造性をも把握することで、指導書には

盛り込まれていない「世界の借家大将」の深化した読みが可能になる。

四 「世界の借家大将」の深化した読み

井原西鶴の浮世草子が、俳諧性にいुरどられた文章であることは前提である。その俳諧的文章の読み方について、当時の読者の視点から読む態度も、言うまでもなく文学作品に向かう際の前提である。授業で、現代に通じる合理的精神・合理的態度を読みとる場合でも、いたずらに現代性ばかりを求めて、作品の読みを歪めてしまつてはならない。読者論の立場からも、谷脇理史氏は『日本永代蔵』について、西鶴が上方（京坂）の富裕町人層（あるいは武家層も含め）を読者層として意識していたと想定する。具体的には、「古典の教養を身につけ、俳諧くらいはたしなみ、生活に余裕を持ち、時には遊廓などにも出入りしている上方の人たち」^⑨であろうと言う。読者は西鶴と同様の生活実感・体験・見聞を持っているからこそ、西鶴の表現方法に着目する。西鶴自身も自己の腕の見せ所とばかりに俳諧的手法を自在に操る。『日本永代蔵』はそういった古典や俳諧に熟知した教養人が、西鶴の創作手法を楽しむための出版であつたらう。また村田穆氏も、『日本永代蔵』出版事情について致富法の教科書を求めたのではなく、「金儲けの話を通じて、金儲けの人生における意義を読者に問い返したのではないのか」と言う。一方、谷脇氏の論に一定の

疑問を呈しつつ、堀切実氏も、「世界の借家大将」が「勤勞・慎み・正直・儉約の徳をモットー」としつつ高い倫理性を追究する堅実型の町人^⑩へ向けた教訓を語るための話としては有効な題材ではないと述べる。

そもそも実在の藤市は、当時吝嗇家として世間からは否定的な評価が与えられていた。谷脇理史氏も『古今大著聞集』（椋梨一雪 一六八四「天和四」年序）の一節を引用して指摘したように、「徹底した吝嗇家であり、一人娘への情愛さえ欠いた無情な男^⑪」として当代の認識があつた。西鶴でさえも『日本永代蔵』以前の諸作品や俳諧句の中では、驚異・非難・揶揄の視点で藤市をとらえている。そんな現実的存在の藤市が西鶴の中で変質をとげ、『日本永代蔵』で形象化されたとき、われわれ読者はそこに表わされる藤市像をどう把握し、どのように文学的創造性を楽しむのがよいのであろうか。三で示した指導書がポイントとしてあげる十二点から、序・中・終の三場面それぞれについて読みを検討してみる。

序盤では、「借家に居ての分限」者にこだわる藤市の心意気を読みとらせようとする。その「心意気」とは何か。現実的には一千貫目の財など歴々の長者に比べたら軽いものでしかない。堀切氏も言うように文学的モチーフでしかなく、虚構の設定である。ここは、藤市の心意気に含まれる意味を説明しなければならぬ。指導書のポイント①にもあるように、「借家請状」の文体がいきなり現れる冒頭部は、それまでの仮名草子・浮世草子にはな

かった画期的な書き出しである。これは②と関連して、外聞や場面といった世間的常識に囚われない実質的人物としての藤市の登場を強く印象づける効果がある。この二つの斬新性により、実在の藤市の負的評価を熟知している読者の前に、全く別個の人格としての主人公・藤市が現れる。固定的常識観念に逆らい、斬新性を付与された藤市を楽しめ、新感覚の商人登場の予感さえ感じさせる。藤市の「心意気」とは、世間一般に挑戦しようという意志である。それが、旧習や旧弊に染まっている歴々の分限者を超越していく。

次に、③で問われる作者の評価の部分より前に、藤市の情報収集家としての側面が描写される部分がある。

この男、家業のほかには、反故の帳を括りおきて、店を離れず、一日筆を握り、両替の手代通れば、銭・小判の相場をつけおき、米問屋の売り買ひを聞き合はせ、木葉屋・呉服屋の若い者に、長崎の様子を尋ね、繰り綿・塩・酒は、江戸店の状日を見合はせ、毎日万事を記しおけば、紛れしことはここに尋ね、洛中の重宝になりける。

経済活動にとって最も重要な情報を、藤市は一日中書きとめている。その情報があったればこそ藤市は「洛中の重宝」として重視されていた。藤市が長崎商いで成功したことは『町人考見録』などにも記述がある。現実の藤市も、長崎での情報だけでな

く『日本永代蔵』で記述されるような情報を重視していたことは容易に想像できる。この部分は、現実の藤市を念頭に主人公・藤市を創造してはいるであろうが、谷脇氏はこの形象化を藤市のイメージ転換として注目する。

この記述により、『永代蔵』以前の吝嗇家藤市のイメージが徹底的にくつがえされ、並の商人の出来ないことをやっている藤市の商才・着眼のすぐれていることが強調されるわけである。(中略) 西鶴は、藤市の蓄財の根底に何があったかを読者に知らしめようとして、藤市の情報収集活動とその意味を最初に提示したのである。¹¹⁾

さらに言えば、情報収集活動を重視するからこそ藤市が単なる質素儉約のみで分限者といわれるほどの財を築いたわけではないことも明白となる。情報収集という、貨幣経済の根本的な部分において合理的であり、そこからもたらされる判断も理にかなったものである。西鶴は、情報収集の重要性を、藤市の造型を通して読者に知らしめている。藤市の合理性・現代に通じる性質とは、こういった側面を読みとってこそ理解できる。

中盤になり、藤市の生活の合理性・人生観が「人の鑑にもなりぬべき願ひ」に基づいていることが提示される。これについても指導書の⑦では、人の手本となるべき意欲の現れだとして、その説明は語釈の範囲でとどまっている。それ以前の④⑤⑥では、例

その直後の「解説」では藤市の娘に対する親心を讀み取るべきことが加えられている。

「わが子を見るほど、おもしろきはなし」とあることから、藤市の教育が、実利に徹したものがらも、子どもへの温かいまなざしに貫かれていることを讀み取る。

温かいまなざしを送る藤市の視線は、藤市特有の合理的精神が娘にまで及ぼされていくことを象徴する。「人の鑑にもなりぬべき願ひ」（＝新しい価値観を体現する行動規範を縦糸として、藤市親娘の精神的連関が横糸になり、西鶴の文学的モチーフに沿った展開がなされていく。読者は藤市の娘がどのように形象化されているのか、それも物語の楽しみとなる。世間的常識にとらわれず、自己の信念のために合理的精神を日常生活で実践していく。そうした親娘の行動様式・規範意識を讀み取る楽しみも読者にもたらされる。

それ以前には、西鶴にさえも吝き者の代名詞として扱われていた藤市。その藤市の吝嗇に潰され自死を選びとった娘。この負的要素を帯びていた現実の親娘を、全く別のキャラクターとして西鶴は変貌させた。虚構の中で構築され、西鶴自身の価値観によって合理的精神の体現者としての性格を付与される。藤市親娘は、俳諧の素質を基盤とした西鶴の作家的創造性によって、虚構化された物語の登場人物となった。「世界の借家大将」を「決して単

純なりアリスチックな世界とみてはいけない」と堀切氏も述べる。単純な教訓譚でもなく、リアリズムに沿ったモデル小説でもない。時代に対する批評精神が込められる。現実を戯画化する役割を担った合理的精神の体現者・藤市としてとらえなければ、「世界の借家大将」の正確な読解はできない。これを高校の授業で指導することは困難ではあるかもしれない。時間の制約もあろう。高校生には理解が難しいかもしれない。しかし、教授者の教材研究の態度として、こうした研究成果を踏まえた読みを視野に入れておくべきである。語学指導においても、文法指導においても、また文章読解指導においても、忌避される傾向のある近世文学作品であろう。だからこそ、教授者は文学作品として取り扱う場合、しっかりと「楽しさ」が伝えられる読みの力が求められる。教科書発行会社では、二でとり上げたような、いわゆる「指導資料」を全ての教科書に対応して発行しており、教授者にとつては教材研究の大きな資料となる。しかし、「指導資料」のみに頼っていたのでは、西鶴浮世草子の本当の面白味を讀み得ることはできない。現行教科書を発行する出版社から一社だけであるが指導書を検討して、「世界の借家大将」を一例に教材研究の方法を提示してみた。

注

(1) 「物語・小説 評論 漢詩・思想 史伝」(安斎久美子・中村幸弘ほか5名 平成二十七年一月 右文書院 142

右文・古A310)、

- 『新編 古典』(安斎久美子・中村幸弘ほか7名 平成二十六年一月 右文書院 142右文・古B319)
- (2) 『古典B 古文編』(木下資一ほか14名 平成二十六年一月 数研出版 104数研・古B314)
- (3) 『新編 古典B 言葉の世界へ』(影山輝國・室城秀之ほか8名 平成二十六年一月 教育出版 17教出・古B309)
- (4) 『探求古典B 古文編』(中野幸一ほか5名 平成二十六年二月 桐原書店 212桐原・古B325)
- (5) 『探求古典B 古文編【指導資料】』(中野幸一ほか5名 平成二十六年二月 桐原書店 212桐原・古B325)
- (6) ラ変型活用がラ行四段活用に移行しつつある当時の口語については、前項『指導資料』中の「授業展開例」でも「問」としてとり上げ、注意を促している。
- (7) 野間光辰氏「日本永代蔵」頭注(『日本古典文学大系48 西鶴集(下)』「岩波書店・一九六〇年」所収)
- (8) 広嶋進氏「『日本永代蔵』における「大福」と諸章の変容」(『西鶴探究 町人者の世界』「ぺりかん社・二〇〇四年」所収)
- (9) 谷脇理史氏「『日本永代蔵』の方法と読者の問題」(『浮世の認識者 井原西鶴』「新典社・一九八七年」所収)
- (10) 村田穆氏「新潮日本古典集成(第九回) 日本永代蔵」(『新

潮社・一九七七年」解説より

- (11) 堀切実氏「『世界の借家大将』の状況設定 —京の町触にみる共同体意識の視点から—」(『読みかえられる西鶴』「ぺりかん社・二〇〇一年」所収)
- (12) 谷脇理史氏「『日本永代蔵』の一章 —吝嗇家藤屋市兵衛の変貌—」(『西鶴研究論攷』「新典社・一九八一年」所収)
- (13) 堀切実氏 前掲(11)
- (14) 谷脇理史氏 前掲(12)
- (15) 谷脇理史氏 前掲(12)
- (16) 野間光辰氏 前掲(7) 補注
- (17) 富士昭雄氏「晩年の西鶴の世界」(『西鶴への招待 岩波セミナーブックス49』「暉峻康隆・富士昭雄・他 岩波書店・一九九五年」所収)
- (18) 堀切実氏 前掲(11)
- (おはら・とおる 元大阪府立池田高等学校教諭)